

糸賀一雄「福祉の思想」を受け継ぐ(2)：『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』を基にした重症児への眼差し

企画者 國本 真吾（鳥取短期大学幼児教育保育学科）
司会者 國本 真吾（ 同上 ）
話題提供者 垂髪あかり（神戸松蔭女子学院大学）
金 仙玉（愛知みずほ短期大学）
指定討論者 渡部 昭男（大阪成蹊大学特別招聘教授／鳥取大学名誉教授）

KEY WORDS: 糸賀一雄 ひとと生まれて人間となる ヨコへの発達

【企画趣旨】

戦後「障害福祉の父」と讃えられた糸賀一雄（1914-1968、滋賀県近江学園初代園長）の思想と実践を継承しようと、2014年に糸賀一雄研究会が発足した。これまで、本学会の自主シンポジウムでは研究会メンバーによる共同企画を実施し、それらを基にする形で、論考15＋コラム5＋資料1から成る『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』（三学出版）を、本年2月に上梓した。23名に及ぶ執筆者は、教育学・福祉学の領域に留まらず、文化人類学・憲法学や実践者にも広く及び、多彩な視点から糸賀一雄の思想と実践について論じた書となっている。

第57回大会（2019）では、糸賀に関する史資料の保存・活用といったアーカイブ作業に注目し、糸賀や氏との関係が深い岡崎英彦（1922-1987、びわこ学園初代園長）の史資料のアーカイブ作業とも交流することで、糸賀や岡崎の「福祉の思想」を深めた。

今回は本書を素材として、糸賀が創設したびわこ学園における重症児者の「本人理解」のあゆみや（垂髪：第3章）、韓国の重症児者の教育・福祉に糸賀思想からどのような示唆を得ることができるかをおさえる（金：第14章）。それらを通じて、糸賀の重症児者への眼差しや思想の現代的・国際的意義を見出す。

【話題提供1：垂髪あかり「重症心身障害児施設『びわこ学園』における重症児者の『本人理解』のあゆみ」】

糸賀一雄の思想を探究するなかで、糸賀の重症児者への「眼差し」は外すことができない。どんなに障害が重くても、一人ひとりの個性を無限に豊かに充実させていくという〈ヨコへの発達〉という考え方は、1950～1960年代当時、「不治永患」と呼ばれた重症児者に、糸賀、岡崎英彦、田中昌人（近江学園研究室主任）らが向けた温かい「眼差し」の交流のもとで創出された考え方であった。私はこれまで、その「眼差し」は糸賀や岡崎ら、近江学園・びわこ学園の中心人物が持った特別なものではなく、療育現場で重症児者一人ひとりと向き合った職員らにも共通のものであったことを明らかにしてきた。

しかしながら、糸賀らが活躍した時代から半世紀以上が経過し、びわこ学園が受け止める利用者像は大きく変化した。障害の重度・重複化、高齢化、医療重度化である。この変化を前に、糸賀らが向けた重症児への「眼差し」は、どのように継承されているのか。

今回は、びわこ学園における重症児者本人の願いや思いを理解する「本人理解」の手法の歴史的変遷をたどり、糸賀らが重症児者に向けた「眼差し」がいかに普遍化、体系化され、利用者の状態像が変化した現代においても、重症児者に関わる誰もが持てるように実践の中に取り込まれていったのか

について報告する。1950年代～2010年代における近江学園（1950年代）、びわこ学園の重症児者「本人理解」の鍵概念としての「ゆさぶり-ひきだし-たしかめなおす」に着目し、具体的実践も挙げながら検討していく。

【話題提供2：金仙玉「韓国の重症児者の医療・教育・福祉の保障を目指して」】

私はこれまで、糸賀一雄の実践と思想に関する2つの執筆作業に関わってきた。一つは、『糸賀一雄の最後の講義一愛と共感の教育 韓国語への仮翻訳』（2016年、神戸大学大学院人間発達環境学研究科教育科学論コース『教育科学論集』19号）である。二つ目は、企画趣旨で紹介した本書における「韓国における障害児教育・福祉保障—糸賀一雄の実践と思想に学ぶ—」である。この論考では、韓国での糸賀に関する研究動向を踏まえて、重症児者への公共リハビリテーション病院設立をめぐる国会討論会の議事録の検討を通して、糸賀の実践と思想が韓国の障害児教育・福祉保障に与える示唆について考察した。議事録の検討では、公共リハビリテーション病院設立を求める親の要求を国はどのように受け止め、その要求をどう実現させようとしているかを中心に考察を行った。考察を通して、公共リハビリテーション病院設立は文在寅政権の国政課題の一つであるが、費用予算不足を理由に消極的な態度を示している。国は重症児者対策において公的責任を明確に打ち出し、必要なサービスを提供すべきだと述べた。しかし、論考は文献検討に拠るもので、韓国における重症児者の医療・教育・福祉の実態を踏まえての考察とは言い難い。

今回は、論考で言及できなかった韓国における重症児者の生活の状況、医療的対応、療育・教育の実践とその実践で大切にしている視点、そしてその視点と「ヨコへの発達」との比較、親の会について報告する。重症児者の親の会については先述した公共リハビリテーション病院設立を求めて国会討論会に参加した親にインタビュー（オンライン）を行い発表する。こられを踏まえて、改めて韓国の重症児者の教育・福祉に糸賀の実践と思想から得る示唆について考え、本シンポジウムの企画趣旨に一助になれば幸いである。

（参考文献等）

渡部昭男・國本真吾・垂髪あかり編、糸賀一雄研究会著（2021）『糸賀一雄研究の新展開 ひとと生まれて人間となる』三学出版。同書特設サイト <https://sites.google.com/view/itogakenkyubook/>

垂髪あかり（2021）『近江学園・びわこ学園における重症児者の「発達保障」—〈ヨコへの発達〉の歴史的・思想的・実践的定位—』風間書房

（KUNIMOTO Shingo, UNAI Akari, KIM Sunok, WATANABE Akio）